

海藻、再生エネルギー、洋上都市。デザインの視点から考える海との共存
Coexistence with the ocean from the perspective of design

AXIS

WORLD'S
DESIGN
MAGAZINE

特集

うみと。

Feature

THE POTENTIAL OF THE OCEAN

10

October 2022 | vol. 219

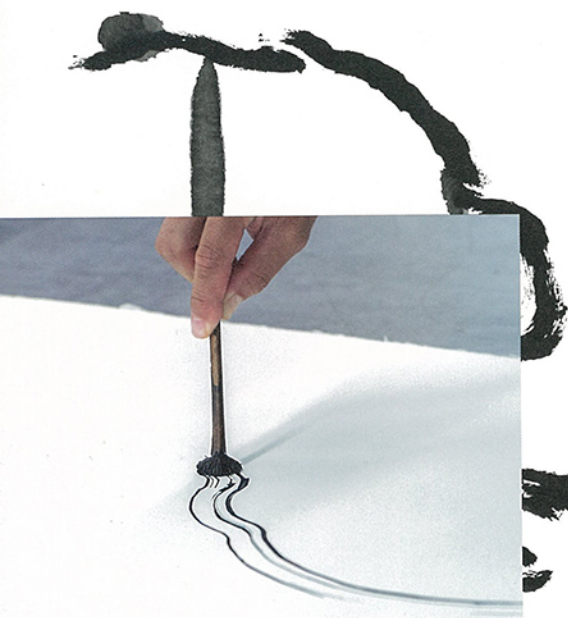
INSIGHT

知覚情報としての

The possibilities of drawing

ドローイングの可能性

as perceptual information



今回のインタビューに合わせてドローイングセッションを試みてくれた鈴木ヒラクと中原一樹。予想外の痕跡が生じるのが面白く、鈴木はよくセッションを行っている。相手に応答してバランスを考えたことがポイントだと言う。
Hiraku Suzuki and Kazuki Nakahara who kindly held a drawing session for this interview. As Suzuki is amused by unexpected results, he often holds the session. He says the point is to think of the balance in response to the counterpart.



ドローイング(drawing)とは、「線を引き」という意味である。美術の技法では「線画」「線描画」と訳され、絵の具で面を塗るペインティングと区別されてきたが、2000年代以降、欧米中心にドローイングが再評価され、コンテンポラリー・ドローイングという新たなアート領域として成熟しつつあり、その世界は今も拡張している。

「Drawing Tube(ドローイング・チューブ)」という国際プラットフォームを開設し、世界を生成する線で捉えようとしているアーティスト、鈴木ヒラクと中原一樹。ふたりは、ドローイングの可能性をどう見ているのだろうか。

文/石黒知子
Text by Tomoko Ishiguro

写真/高橋マナミ
Photos by Manami Takahashi

生きることは線を生むこと

デザインのプロセスにおいてドローイングは、キーワードとして与えられたあるデザインの目標を形として具現化していくための最初の一步と捉えることができる。下絵、あるいはアイデアスケッチである。思考の過程を示すため、アウトプットの創造性にそれがどう寄与するのか、思考とドローイングの描写との関係性を探るデザインの研究もある。一方で、アートの世界では、より知覚的で情報に富んだ線としてドローイングを深化させてきた。

イギリスの社会人類学者ティム・インゴルドは、2007年に著した「ラインズ 線の文化史」において、洞窟壁画の線刻をはじめとした文化人類学への考察から、ドロー(draw)は「引っ張る」という動詞だが、それは糸の操作であり、軌跡の痕跡であると定義した。手で描かれたあらゆる線は身振りの痕跡であり、あらかじめ描き手の頭のなかにあるイメージの投影(プロジェクション)とは異なると説く。「歩くこと、物語ること、歌うこと、書くこと、生きることは線(ライン)を生むことだ」とも記している。

運動と方向性がもたらす拡張性

そんな生成する線の連なりに注目することで、ドローイングは世界の輪郭を捉える行為という広い概念となる。その線は、導くものであると同時に、導かれるものでもある。

「実際に世界は、線的な事象に溢れています。根や茎や葉脈を持つ植物をはじめ、地中にはアリの巣やトンネル、地表にはカタツムリが歩いた痕跡や張り巡らされた道路、空中には飛行機雲や目には見えない放射線や宇宙線があり、また何かと何かをつなぐ関係性の線もある。私たちは無数の線に囲まれています。ドローイングとは線を描くことだけではなく、線を見出す行為でもあるのです」。こう語るのは、ドローイング・チューブという国際プラットフォームを16年に立ち上げ、ドローイングの拡張性を研究している鈴木ヒラクである。「チューブ」には、場として固定する「センター」や「ルーム」と異なり、動きがありつつ分断しない接続する線としての思いを込めている。

幼少より描くことが好きで、遊びがてらぐちゃぐちゃの線を書いて楽しんでいた。鉛筆を動かしたときに線がついてくることに驚きと喜びを感じた。「ペインティングはレイヤーを重ねて表面をつくりますが、ドローイングはある表面の奥から何かを削り出して痕跡をつくります。子どもの頃は発掘も大好きで、地面を掘って土器を見つけた

りもしていた。その発見の感覚が自分の描く行為の原点となっています」。

中原一樹は、ドイツでドローイングを学び、現在はベルリンを拠点に活動している。「日本では馴染みが薄いかと思いますが、ドイツではドローイングのアーティストを独立した呼称で「ツァイヒナー」と呼ぶのが浸透しており、ペインティングとの境界がより明確に区分されています。およそペインティングでは行わないような歌唱や詩を詠む授業もあり、そこから線の自由な意識を学んでいました。ドローという行為には身体による運動が伴い、それが画面に痕跡として残ります。線に運動と方向性があるから拡張性が生まれ、ダンスやパフォーマンスなど、ほかの領域ともつながっていくのです。日本の書の運筆も一瞬の行為ですが、ドローイングも同様に戻れないし、取り返しがつかない、瞬発的なところがある」。

ドローイングの広がり

ドローイングの再定義・再評価が欧米で加速したのは2000年代に入ってからで、今ではコンテンポラリー・ドローイングはひとつの表現領域として確立されつつある。すでにヨーロッパではドローイングに特化したアートフェアも数多く開催されており、即時的で気軽なところもあることから、入りやすいメディアとして若い人たちにも支持されている。

また1990年代から2000年代前半にかけて、奈良美智の一見落書きのようにも見える少女の素描や、草間彌生の終わりなく繁殖し続けるような線が海外から高く評価された。ストリートアートやグラフィティなど、描く、あるいは書くという行為そのものを都市に提供するようなムーブメントもドローイングを推進させた。日本が強みとするサブカルチャーや漫画にもドローイングの行為があり、意識せずとも以前より日本のアートシーンにおいて当たり前のようにドローイングの要素が重要なものとして現れるようになってきている。

「今、手がどう動いている? 何を見ている?」

ドローイングは動きを伴うものであり、だからこそアーティストは、毎日、手を動かすことを日課とする。中原もベルリンでは自宅からアトリエに通う道すがら森に立ち寄り、枝を拾って、それを筆代わりに描いてみるといった日々を送ってきた。動きと方向性があるその一本の線に込められた情報は、はかりしれないものとなる。既存の言語や文章を書くのとは別次元の情報量である。

2020年、世界がパンデミックによる混乱に陥った際、鈴木は「何かしなきゃいけない、と直感しました。ドローイングは痕跡をつくること。今という時代に何かを刻んで未来につなげる行為が大切だと思ったのです」。

いくつものドローイングを集めれば、その時代の空気を起こっていたことを後から再生できるレコードのような記憶装置となるのではない。20年春、ドローイング・チューブは知人から知人へ、アーティスト同士のネットワークを介して、「今、手がどう動いている? 何を見ている?」と投げかけ、短文とドローイングの断片を送ってもらうプロジェクト「シグナルス」を立ち上げた。翌年秋までに30の作品が集まり、今夏、同名の本として上梓された。

「展覧会で発表するような作品ではなく、日常の断片です。写真1枚でもかまわない。何かを観察してインプットする。そこに揺れやブレは



ドローイング、銅版画、書をフィールドとする中原一樹は、異なる身振りから生じる線を組み合わせる。筆跡が残らない銅版画に、石で偶発的に生じた痕跡を与え、意図的な行為と偶発的な行為が共存するちょうどよい温度感を漂う。

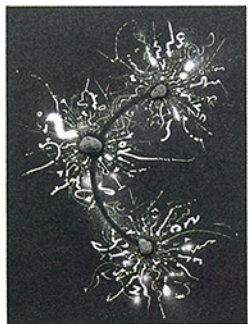
Nakahara's field includes drawings, copperplate etching prints, and calligraphy. With copperplate etching where brush strokes are absent, he applies traces that resulted accidentally with rocks so that intentional and spontaneous actions coexist. He explores for just the right sense of intensity.



生成する一本の線から どんな知覚情報を 受け取るか

中原は、色鉛筆で細かく規則的な線を無数に引き、その上から木炭や筆で異質な線を入れる。本作は小品だが通常は150~180cmほどのスケール。「一本の線を引き続けるために鍛錬している、自分の線が生くる瞬間をつくっています。行くこと決めたなら行く。怖いけれど、スリリングで楽しい」。

Kazuki Nakahara first draws numerous fine lines in an orderly manner with color pencils, and then draws lines with different textures with charcoal and brush over them. This piece is small, but his usual scale is about 150 to 180 cm. "I train myself to draw a single line and make moments when my lines will come alive."



鈴木ヒラクの代表作に作品群「Constellation (コンステレーション/星座)」があるが、これは実物の石を画面に固定してから、同様に光を反射するシルバーのスプレーやインクを用いて描いた新作。まず画面を見ずに身体で動きで星雲のような偶発的な点の集合を生み出し、そこに無数の記号を刻んでいく。中央の溶岩の穴から出る閃光や、惑星間の交信なども想像させる。

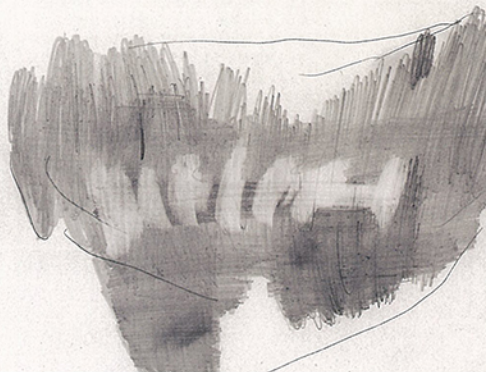
One of the representative works by Hiraku Suzuki is his series titled *Constellation*. This is a new work made by first fixing a real rock on the surface and then drawing with silver spray paint that reflects light and ink similarly. First, without seeing the screen, he created assemblies of accidental dots, like a nebula, then draws numerous symbols over them. It also makes the viewer imagine such things as flashes of light coming from the molten rock at the center and communication between planets.



さまざまな手法を取り入れている鈴木は近作で、ここでは和紙に墨汁やシルバーインクを用いて描いている。距離を必要とするため机上ではなく床の上で描いており、パフォーマンスによる身体的な負荷は大きくなるが、それにより動きと方向性が際立つ。

A recent work by Suzuki. It is drawn with black and silver ink on *washi* (Japanese rice paper). As it requires a certain distance, the paper is placed not on a desk but on the floor, so the physical load due to the performance increases, but above all, the movement and directionality stand out.





トマス・ゴアの「モダンダンス」。目的もなく手を動かした作品だが、後にこれを振り返り「ロックダウンという状況の異常さから口数が少なくなった家のリズムや街の息吹に耳を傾けようとした観察方法であった」と分析している。

The Modern Dance by Tommaso Goria. It is a piece he made while aimlessly moving his hand, but upon later reflection, he analyzes and says, "It was a method of observation while trying to listen carefully to the rather quiet rhythm in the house and the pulsation of the streets due to the abnormality of the lockdown."

写真、ドローイング、ビデオをフィールドとするマリナ・フェレティは、ロックダウンのなか、庭の野菜を育て始めた。植物を観察していくうちに日々生じる小さな変化を肉眼で感じ取るようになった。その戸外制作を視覚的に変換した作品である。

Marina Ferretti who's field is photography, drawing, and video started growing vegetables in her garden during the lockdown. While observing the plants, she started sensing minute changes occurring daily with her naked eyes. This piece was made by converting her outdoor work into a visual piece.



インスタレーションなどジャンルを問わないアプローチでドローイングの拡張に挑むニコル・レンジは、パンデミックの解除後、すぐさま街に出た。交通量と人の往来が少なく、視覚的なスペースが増えたそのときの都市を記録した。Nicole Lenzi who explores expanding the realm of drawing through an approach unbound by genres, took off into the streets immediately after the lockdown was lifted. She recorded scenes of the city when there was less traffic, fewer people, and increased visual spaces.

パンデミックでアーティストは何を考えていたのか、30の作品がドキュメンタリーとして収録された「シグナルス」。企画・編集はドローイング・チューブ（鈴木ヒラク、中原一樹、水野 妙、トマス・ゴア、ニコル・レンジ）。出版を記念し恵比寿のナディフで7月末まで作品の展示・販売が行われた。

Signals contains 30 works as documents regarding what the artists were thinking about during the pandemic. Its planning and editing was done by Drawing Tube. To commemorate the publication, display and sale of works were held until the end of July at NADIFF in Ebisu, Tokyo.

Signals
Drawing
Tube



歩くことや旅の経験を写真で作品にできた西野壮平の「スタディ・オブ・アンカレッジ」。近くの漁港で小舟につながれたロープが波の振動で変化する様子を毎日、撮影した。旅に出ることが叶わない自身を小舟と重ねたのか、そこには不安や焦燥が現れていた。

Study of Anchorage by Sohei Nishino who expresses his experiences from walking and traveling through his photographic works. He took photos of how a rope tied to a small boat changes with the vibrations of the waves daily at a fishing port. Perhaps by superimposing himself (who cannot travel due to Covid-19) over the boat, a sense of anxiety and frustration appeared over it.

あったか。パンデミックにより変容していく社会のなかで、作家の手法がどう動いたかを知りたかったのです」と中原が言うと、鈴木は「ドローイングという意識がなくても、普段から目や手を動かして世界を感じている人たちに声をかけました。例えば、言葉と言葉を結んでテキストを書くのも線的な行為となり得ます。何をもって日常というのが問われるような特別な時間のなかで、多くの人の状況も気持ちも揺れていた。世界の微細な振動をアンテナでキャッチするようにして生成された、小さな痕跡たちを集めたいと思ったのです」と続けた。

人々がドローイングに引き寄せられているのは、なぜだろうか。その理由を鈴木は次のように分析した。「表現するということに対しこれだけメディアが出尽くしている現代だからこそ、あらゆる創造行為の根源にある『描く』ということに帰帰した結果なのではないでしょうか。また、ドローイングの持つ拡張性と、そこから線とは何かについて掘り下げていくことも時代の必然だったと思います」。

掘り下げる行為とは、人間が人間を中心とした世界での方法論ではなく、そこにある痕跡を線として残すことによって、人間以外の世界と人間との関係に気づき、再考することと言い換えることができる。混沌とした現代には、そうして線を引き直すことが求められている。人間の外にある線は、単に創造性を促すためにあるのではない。線をどう発見できるか。それは生きていくための発見となるのである。

"Drawing" literally means to draw lines. As a technique in art, it is translated as "picture with lines" and has been distinguished from painting that uses paint, but since the 2000s, drawing has been reevaluated mainly in Europe and the USA and has been developing into a new field of art as "contemporary drawing," the realm of which keeps expanding even today. Two artists Hiraku Suzuki and Kazuki Nakahara started an international platform called "Drawing Tube" in an attempt to depict the world with the lines they generate. How are these two artists seeing the possibilities of drawing?

To live is to generate lines

In the process of design, drawing can be considered as the very first step in realizing the objective of design, which is provided as a keyword, as a form. In the world of art, on the other hand, drawing has been deepened with more perceptible lines rich in information. In *Lines—A Brief History* (2007), British Social anthropologist Tim Ingold says the verb "draw" means to "pull," and defined it as an act of pulling a string and a trace of its locus from his study in the history of cultural anthropology including cave paintings. He explains that every line drawn by hand is a trace of human action, and it is different from a projection of an image that preexisted in the drawer's mind.

By focusing on such layers of "making of lines," the act of drawing would have a broad concept of acts of grasping the contours of the world. The lines at the same time guide and are guided.

"In fact, the world is flooded with linear phenomena. To begin with, there are plants that have roots, stems, and veins, then there are ant colonies and tunnels underground, traces of snails crawling on the ground and roads running throughout the surface, vapor trails, invisible radioactive rays and cosmic rays in the sky, and there are also lines of connections that link one thing to another. We are surrounded by infinite number of lines." "Drawing not only means to draw lines but also to discover (invisible) lines." These are the words of Hiraku Suzuki who researches the extensibility of drawing and launched the international platform Drawing Tube in 2016.

As Suzuki has loved drawing ever since he was very little, and used to have fun drawing meaningless messy lines. "When painting, I create the surface in layers, but when drawing, I create a trace by carving out something from behind the surface. I also liked excavating when I was a child, so I used to dig in the ground and find ancient earthenware. That sensation of discovery has been the starting point of my act of drawing things."

Kazuki Nakahara studied drawing in Germany and is now active based in Berlin. He says, "In Germany, it has already common to call artists specializing exclusively in drawing as *zeichner*, so the line between artists is clearly defined. In drawing, there are also classes like singing and reciting poems that aren't offered in painting classes, so I learned the liberal consciousness of lines in such classes. As the act of drawing involves physical motion, it remains as traces on the surface. As the lines have motion and directions, expansibility is born and connection with other genres such as dance and performance is born."

"How is your hand moving now? What are you seeing?"

As drawing involves hand movement, artists make sure they move and use their hands as their daily routine. Nakahara has made it a daily routine to stop by a forest, pick up a branch and use it as a brush on her way to her atelier from her house while in Berlin. The information contained in that single line with movement and direction becomes an unfathomable thing. In 2020, when the world was thrown into a panic with the pandemic, Suzuki intuitively thought it was necessary to do something, and says, "As to draw was to leave a mark, I thought it was important to take some kind of action that leaves a mark for the future." He thought it might be possible to make a device that memorizes things and atmosphere during that time, and then play them back later like a record if numerous drawings are collected. In the spring of 2020, Drawing Tube launched a project called "Signals" asking people to send short sentences and fragments of drawings by questioning, "How is your hand moving now? What are you seeing?" through a network of artists that connects one acquaintance with another. Thirty works were collected by autumn the following year and the collection was published as a book with the same title this summer.

"They weren't types of works that can be displayed in an exhibition, but depicted fragments of daily lives. It's like observing something and making an input. Were there any fluctuations or blur? We wanted to know how the

hands of the artists moved in the society that keeps changing due to the pandemic," Nakahara explains. Suzuki continued, "In an unusual period when it is difficult to define what is 'daily,' circumstances and thoughts of many people were blurry. I wanted to collect small traces generated as if detecting minute vibrations with an antenna."

Why are people attracted to drawings? Suzuki analyzes as follows. "It may be the result of returning to the act of 'drawing,' which is at the root of all creative acts because we're in this contemporary era when every possible media thinkable has been exhausted in act of expressing. We also think it was inevitable in this age to delve into what the expandability in drawing is and then what a line really is."

The act of "delving" can be rephrased as noticing the relationship between the world other than human beings and the relationships among people by leaving marks existing there as lines rather than the methodology of the world centered around human beings. It is demanded to redraw that line in such a manner in this chaotic period. Lines that exist outside human beings do not exist simply to encourage creativity. How to discover lines.... That will be a discovery for humankind to live on. ②

What kind of perceptual information is received from a single generated line?



すずき・ひらく／アーティスト。ドローイング・チューブ主宰。1978年生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科修了後、世界各地でレジデンスを経験する。ドローイングの概念を拡張する研究を行い、平面、彫刻、映像、写真、パフォーマンスなど多様な手法による制作を展開。2021年より東京藝術大学大学院美術研究科グローバルアートプラクティス准教授。

Hiraku Suzuki born in 1978 is an artist and head of Drawing Tube. He graduated with an M.F.A. from the Department of Intermedia Art, Tokyo University of the Arts. He did research into expanding the concept of drawing and has produced works using diverse methods including two-dimensional works, sculptures, video, photography, and performance. He has been an Associate Professor, Global Art Practice, Graduate School of Fine Arts, Tokyo University of the Arts since 2021.



なかはら・かずき／アーティスト。1980年香川県生まれ。祖父・父ともに前衛書家の家に育つ。2005年より拠点をベルリンに移し、10年ベルリンのヴァイセンゼー美術大学絵画科を修了。同大学にてマイスター・シューラーを取得。20年ドイツの著名なツァイビナー（ドローイングアーティスト）の名を冠したエグモント・シェーファー賞を受賞。ドローイング・チューブの運営メンバーのひとり。

Kazuki Nakahara is an artist born in Kagawa Prefecture in 1980. He moved his base to Berlin in 2005 and graduated from Weissenhof Academy of Art Berlin in painting in 2010. He acquired his Meisterschüler (master's degree) there as well. In 2020 he received the Egmont Schaefer Prize for Drawing, which is named after the famous German drawing artist. He is also a managing member of Drawing Tube.